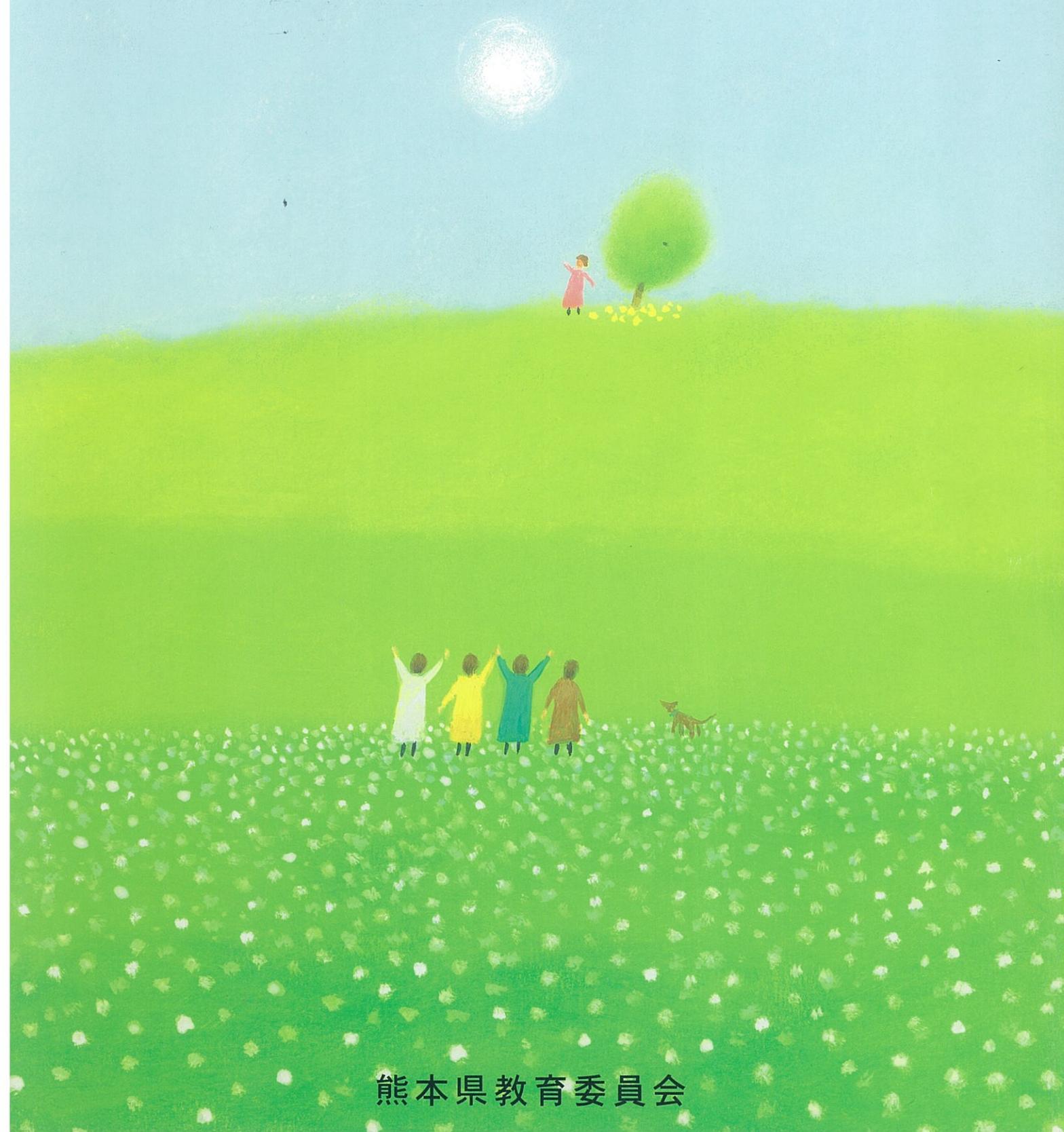


道徳教育用郷土資料

熊本の心

小学校5・6年



熊本県教育委員会

日達聖人と仏舍利塔

ぶつしやりとう



ふじい にったつしょうにん
藤井 日達聖人



藤井日達聖人は、坂梨村（現在の阿蘇市）の農家に生まれました。周りの人たちは、日達聖人は将来、農家の仕事をするものだと考えていました。しかし、日達聖人は、おぼうさんのお話を聞くのが大好きでした。自分の心が落ち着き、幸せを感じるからです。

明治三十七（一九〇四）年、いよいよ日達聖人も十九歳になりました。仕事を決める時がやってきました。（農業をしようか。周りのみんなもそう考えている。だけど、おぼうさんのお話は私を幸せにしてくれた。私もあるように人の心を幸せにする仕事がしたい。）

日達聖人はついに、おぼうさんになることに決めました。しかし、父親や親せきは、農学校にも行つたのにどうして農業をしないのかと大反対しました。そんな中で、ただ一人日達聖人を支えてくれたのはお母さんでした。お母さんは、「人の心を幸せにする仕事がしたい」という日達聖人の思いは立派なことです。この子の志は大切にしてやりたい」と言い、反対するお父さんたちを説得したのです。

それからの日達聖人は、立派なおぼうさんになるために、いろいろなお寺で一生けん命に勉強しました。その後の修行は言葉にならないくらいつらいものでした。はだしで、うすいころもをま

農学校
主に農業を勉強する学校（農業学校など）。

聖人
徳の高い僧の尊称。

とい、その上、食事をとらなかつたりたきに打たれたりしました。そんな修行にたえながら、ねる時間もおしんで日本中を回りました。

日達聖人の修行は、国内だけにどどまりませんでした。ある時、中国に行つた時のことです。そこで白い仏舎利塔ぶつしゃりとうと出会いました。仏舎利塔は、焼け野原になつた町を見守るように白く美しく立つていました。この塔は、戦争の最中にあつても敵てきからこうげきを受けることなく守られたことを知りました。日達聖人は、心が洗われるような思いがしました。

帰国した日達聖人は、弟子といつしょにあちこちにお寺を建てながら修行にはげみました。そんな日達聖人たちを支えていたのは日達聖人のお母さんでした。ずっと食事の世話や洗たくなどをしていたのです。しかし、そのお母さんも病にたおれ、日達聖人に見守られながらねむるよう亡なくなりました。（お母さん・・・私は、いよいよ一人ぼっちになつてしましました。）日達聖人の目はくもり、遠くを見つめるようになりました。

日達聖人はお母さんの死後、おしゃか様の予言によつてインドへ旅立つことにしました。きっとお母さんのたましいもインドへ行つていると考えたのです。

インドを修行中のある日、立ち寄つたセイロン（現在のスリランカ）で、不思議な出会いがありました。とめでもらつたお寺のおぼうさんが、日達聖人の人を幸せにしたいという生き方に感動し、「あなたこそ、これを持つべき人です。さあ、どうぞ。これから



仏舎利塔ぶつしゃりとう
おしゃか様のお骨こつが納おさめられている建物。

活やくに期待しています。」

と言つて、仏舎利をくださつたのです。あまりに尊い方の遺骨です。日達聖人は、それをふるえる手でにぎりしめました。

インドでは、世界平和をいのる指導者マハトマ・ガンジーと出会いました。志を同じくするものとして日達聖人もぜひ会いたいと願つていた人物でした。そのころ、世界では、戦争で多くの人々が亡くなつていきました。ガンジーは、絶対に武器を持たず、暴力を使わず、人の心や体を傷つけずには政治を変えようとしていました。ガンジーはおだやかに、やさしくほほえみ、日達聖人を見つめ続けました。日達聖人の目からは次々に涙がこぼれ落ちました。言葉は通じない二人でしたが、ガンジーは日達聖人をグルンジーと名づけて平和を願う心が、確かにつながったのでした。

多くの人々の命をうばつた第二次世界大戦が終わり、日達聖人は日本へ帰りました。そして、一人でふるさとの阿蘇の山の中に入りました。（人を幸せにするために私にできることは何だろう。）一人静かに考え続けました。おぼうさんになることを受け入れてくれたやさしいお母さんの顔、苦しかつたいろいろな修行、中国で出会つた白い仏舎利塔、

仏舎利をくださつたおぼうさんの顔、ガンジーのおだやかなやさしい眼差し、戦争で苦しみ、命を失つていった多くの人々……いろいろなことが日達聖人の心にうかびました。

「よし！」

日達聖人は、仏舎利を持つて立ちあがりました。

日達聖人は、熊本市の花岡山に仏舎利塔を建て始めたのです。雪の降る寒い日も、食べものがないときでも、日達

マハトマ・ガンジー
インドの政治家。非暴力によってインドの独立運動をリードした。

聖人はこつこつと仏舎利塔を建て続けました。日達聖人の考えに賛成するたくさんの人たちも協力するようになりました。そして、ついに仏舎利塔が完成したとき、花岡山では戦後初めて世界平和を願う人々が集まり、世界宗教者平和会議が開かれました。

その後、日達聖人は、たくさんの仏舎利塔をアメリカ、ヨーロッパ等世界中に建てました。そして百一歳で亡くなるまでずっと世界中を回り、平和へのいのりと行動を続けました。

今も白い仏舎利塔は、世界平和を願いながら高台から人々の安らかな生活を見守り続けています。



はなおかやま ぶっしゃりとう
花岡山の仏舎利塔（近景）



せんすいきょう
仙酔峡の仏舎利塔

藤井日達聖人は、幼いころからお寺参りが好きだった。農学校在学中に宗教家になることを決意した。卒業後は、いくつかの大学に入學してお寺に住まわせてもらいながら仏教について学んだ。大正七（一九一八）年、中国で最初のお寺を建て、その後、日本各地にお寺を建てた。花岡山に建てた仏舎利塔では、自分の宗教・宗派にとらわれない世界宗教者平和会議を開いた。

世界宗教者平和会議
仏舎利塔が、世界平和を象徴することから、各界から宗教のわくにとらわれず、世界平和をいのるさまざまな人たちが参加した会議。